

五月十六日付「国民新聞」によれば、金子堅太郎がかつて在学していたハーバード大学のLLD学位授与式に出席するため、同月二十六日バンクーバー行の日本郵船で出発することになり、そのため東京株式取引所理事長を辞職したことが報じられている。家人の伝聞では、福重好平の留学をこの時ではなく、後述する日露戦争時の対米外交工作のため金子が渡米した時のように伝えているが、年代から推定すればこの学位授与式の時のことではほぼ間違いない。福重好平がいとこの八代則彦に受験英語を教えたというのも、渡米のために東京本郷の自宅に待機していたこの時の話であろう。

好平（照平房）はのちに、船中で金子堅太郎から英会話の特訓を受けた事や、売店でニースペーパーを買ってこいと命ぜられたが、英語が通じなくて困ったことなど、その思い出を家族に語っている。

もともと荒木清勇は長男・好平を外交官にするつもりでシカゴ大学の政治学科にすすませたという。また次男の荒木隆平は商人とするために大阪商科大学にすすませ、これは卒業後三井物産に勤めている。けれども、好平はその後外交官の職を弊履のごとく捨ててしまい、出家して僧侶になるのだから縁とは不思議なものである。

次いで明治三十七年二月日露戦争の最中、その講和の仲介を依頼するため金子堅太郎が再び渡米して対米工作をしたことは歴史の教科書などで周知のことである。それは金子が

ルーズベルト大統領とハーバード大学で同級生だったため、個人的な友情をたよりに、日露戦争におけるアメリカの対日政策を有利に運ぶためと、ニューヨークに滞在して各種の講演会やパーティーに出席してロビー活動や世論工作をするためであった。このことは金子堅太郎の講演記録に詳述されていて、アメリカが思いのほか親日的だった当時の様子を知らることができる。この訪米時にも留学中の福重好平は金子堅太郎のもとに挨拶に訪れているはずだが、それはさだかでない。

アメリカではちょうどその年の四月からセントルイス万国博が開催されている。好平はシカゴ大学で東洋哲学や易学をかじっていたようで、友人の薦めもあって、易者のまねごとをしてみようということになったらしい。日本館の片隅にでも占いの見台を置いて、にわか仕込みの手相見でもしたのであろう。するとこれがおりからの親日的な空気と東洋趣味があいまって大当たり、一年余も遊んでくららせるほどの稼ぎになったという。それまでも実家から毎月二百五十円もの仕送りで何不自由ない学生生活を送っていたというが、これですますアメリカが好きになった好平は、卒業後も一向に帰国する気配もなく、そのままずると居ついてしまった。当時日本では千円で百坪ほどの家が手に入った時代であるから豪勢なものである。

かくして遊び惚けて日を送ること数年、彼が日本に帰ってきたのは弟の隆平が連れ戻し

に行つた明治四十年になつてからのことだつた。

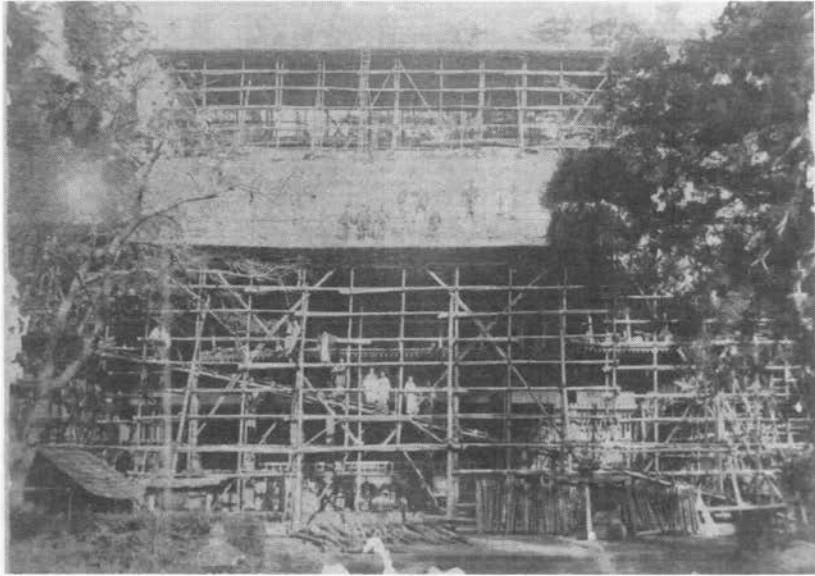
(注) 金子堅太郎は伊藤博文のもとで井上毅・伊東巳代治らとともに憲法・皇室典範の起草にあつた事である。名。その後は数次の伊藤内閣で農商務次官・同大臣・法務大臣を務め、枢密顧問官となつた。

*大石寺派分離独立の認可

一方、荒木清勇らの永年の尽力が実り、大石寺派が本門宗(日蓮宗興門派)からの分離独立が認められたのは明治三十三年であつた。胤師が明治六年に「一本寺独立願」を出してから実に二十七年の歳月が過ぎていた。

すなわち同年九月十八日、内務省から日蓮宗富士派を名称として正式に認可され、これによつて法人格をもつた近代宗門が誕生したといえる。

この前年、日蓮宗興門派は「本門宗」と改称し、管長も従来通りハケ本山の輪番制で連合体を維持してきたが、大石寺派の分離独立認可の感触がえられ、応師は輪番管長就任を見合わせ、この年の一月から加藤日普・土屋慈観・佐藤慈一・大垣俊雄・堀慈琳らをメンバーとする宗制寺法制定の準備が進められていた。その作業も順調にすすんで八月二十一



御影堂改修は銅瓦葺、向拝の唐破風、御宮殿の新調など大規模となった。

日付けて内務大臣（西郷従道）に申請書を提出、
ようやく認可となったのである。

ここに、幕政以来の本末制度はじめ、山法山規という慣習法によって運営されてきた大石寺門流が、明文化された宗制寺法をもって運営する自治制を備えた宗教団体となった。管長・法主兼任制、学頭・管長候補者選挙、宗会制度、宗務院や学林、宗費、僧侶の位階、寺院の等級、檀信徒賞罰規定などが定められ、教団運営の制度が定まったのである。

この年の十月には第一回宗会議員選挙も実施され、十一月四日には富士派独立発表式が改修された御影堂で挙行され、一門は喜びにわいた。さらに明治三十四年九月にはこれも荒木らが以前から奔走していた大石寺旧境内地の上地払下げもようやく許可となり、これで名実ともに一

宗門としての基盤が整い、外患を除いたかつこうとなった。

しかし宗派としての体制が確立したことは、良いことづくめばかりではない。のちに宗門内に派閥争いという内憂を惹起させるものでもあった。

幕府時代の宗門の行政は、学徳および法臘上位者による長老政治であり、貫首選定も細草檀林（学校）の能化就任順に学頭・貫首に昇進する、いわゆる年功序列型で、お家騒動などおこる余地の少ない、きわめて安定した制度であった。（近年、血脈付法について貫首の指名制等ということが当然のごとく言われているけれども、「貫首が自分の意志だけで自由に後任者を選ぶ」などという独裁的な制度は、当時の社会通念上からもあり得ることではない。大石寺貫首もまたそれぞれの時代の政治体制に応じた慣習法の上で選定付法がおこなわれてきたのであった。）

この点において近代宗門は、他の仏教教団の宗制にならって近代化かつ民主化され、学頭選挙（管長候補者選挙）や宗会制度によって宗内世論を反映するようになったから、おのずから小さな宗門にも管長・法主の座をめぐって門閥抗争が激しくなった。たとえば明治三十九年には早くも次期管長候補の学頭不信任問題がおこって宗会解散となり、その後も柱師への管長不信任決議と辞職強要事件、開師と有元師の管長選挙における醜聞、戦後の満師や昇師の辞職にいたるまで、強い権限をもつ管長・法主の選定をめぐってたびたび

法類・派閥による泥仕合が起きている。

この点、荒木清勇の「血脈相承について」（『純正日蓮主義』所収）などは、当時の法主信仰に変質した血脈観に対する比較的公平な見方を示しているが、いまは本題からはずれるので別の機会に譲ることとする。

*昭憲皇太后の夢

そのころ中国大陸では義和団事件の混乱に乗じてロシアが満州を占領、さらに朝鮮半島の形勢をもうかがっていた。南下を目論むロシアに対して我が国の警戒感是一段と高まり、明治三十五年、日英軍事同盟が結ばれるにいたって対立は決定的となった。ついで明治三十七年一月、日露交渉はゆきづまり、二月六日には日本側から駐露公使を通じて国交断絶を通告し、同月十日宣戦布告している。

もとよりこの戦争の目的は、朝鮮半島および大陸における權益の争奪戦で、南進策をとるロシア帝国と大陸進出を試みる日本帝国は早晩衝突せざるをえない命運にあった。それはまた欧米列強の植民地競争に遅れて加わった帝国主義国家・日本の浮沈をかけての戦いでもあった。

そのため、当時の国力や軍事力からみれば無謀とも思える開戦ではあったが、国民的戦

意は、ロシア側が低調だった事に比べ、日本側は驚くほど高かったといわれる。その背景には、ロシアの強引さがいたく日本人のナシヨナリズムを刺激していたことに加え、欧州列強のアジアへの侵略が、反欧米や、反近代の情念となって高まっていった事があげられる。こうした国民感情が大和魂に象徴される国家主義に収斂されていったから、反戦を主張する者はごくわずかで、世論は沸騰し、国民一丸となって戦争に突入していった。

二月六日、国交断絶が通告された夜、おりしも葉山御用邸に滞在中の昭憲皇太后（明治天皇皇后）がある夢を見た・・・。

それは皇后が、お上の御苦衷を思い、国の行く末を案じ、心を痛めて眠れぬ夜を過ごしていたところ、そのまどろみの中に、枕元に見知らぬ白装束の三十七、八歳の志士があらわれた。跪ひざまづいていた志士がやがて顔をあげて言上した。

「・・・臣は坂本龍馬に候が、このたびの白露開戦にあたっては、少しも御心を煩わし給うことなきように。臣も及ばずながらわが海軍を守護し奉りますゆえ、勝利は疑いなきことと思召され、ご安心下されたく・・・」と言いおわるや、やがていづこともなく消え去ったという・・・。

もとより、皇后が坂本龍馬の容貌を知るわけもない。翌日、この話をもれ聞いた皇后宮太夫香川敬三侍従が、不思議に思っ、坂本龍馬の写真をとりよせて皇后の居間の机上に



恩賜の絹で作った袱紗

進めおいたところ、まさにこの男であるとの御意。坂本の写真とは、かつて長崎で海援隊を率いていた時の写真で、山県公爵秘蔵のものであった。

この件は戦勝の吉瑞として政府部内でも話題でもちきりとなり、新聞にもとりあげられてたちまち全国に広まっていった。日露開戦に際し、死せる坂本龍馬が期せずして国民的英雄となり、戦意昂揚に大きな役割をになう格好となった。そこに政府関係者による世論対策のための作爲的な意図がひそんでいたとの見方もあるが、むしろ一般民衆の側に、こうしたエピソードを望んで受け入れる熱狂があったことは確かである。

その後、同年五月になって逋信大臣の大浦兼武が京阪地方に公用で赴いた際、寺田屋を訪ねたことがきっかけとなり、こんどは翌六月になって荒木清勇が寺田家に残る坂本龍馬の手紙や遺品を携えて、東京の大浦大臣官舎を訪ね、これを披露した。大浦兼武はさきの御夢想と思い合わせて不思議に思い、早速皇后に拝謁して上覧に供した。すると八月二十五日にいたって、香川子爵から大浦大臣を通じて、坂本龍馬の功績に対しその褒賞のために金若干を下賜され



るとの皇后陛下の御意が清勇に伝えられてきた。それは坂本龍馬の血縁が絶えたため、家族同然のつきあいのあった寺田家に下賜されるというものであった。

同年九月、寺田伊助・荒木英一（清勇）らは宮中に参内し、金一封とともに紹の反物が恩賜された。兄妹はこの紹を裁ってふくさに仕立て、それぞれに宮内省御歌所に加藤義清作の歌『国母陛下の御瑞夢』を写し、また大浦大臣の手で「恩賜之紀念」と揮毫を得て、これを兄弟が分け合い、今に家宝として伝えている。またここに掲載した坂本龍馬の写真は、このとき荒木が皇后陛下に献上した写真を複製して関係者に配布されたものと思われる。徳富蘇峰なども同様の写真を所蔵している（霊山博物館所蔵）。

こうした皇后陛下の御意は、いまでは想像もできないほどの栄誉であっただろう。これに感激した寺田・荒木兄弟は、御厚恩に酬いるべく、早速行動を起こした。

それはこの時の『国母陛下の御瑞夢』に作曲を付し、さらに荒木英一作歌の『大和魂』を付して十一月に吉川弘文館から出版している。ついでこの冊子を小学校の唱歌科教科書として文部省の認可を受けて頒布したため、この歌は全国の小学三年生に愛唱されている。

また『大和魂』は日本ビクターのレコードにもなっている。

両人はさらに恩賜金をもとにして「坂本龍馬忠魂碑」を東山の墓前に、同じく「恩賜紀念之碑」を伏見の寺田屋跡に建碑している。この忠魂碑建立についても皇后の御内意があったともいわれ、『淑女画報』大正三年五月号「皇太后宮御一代絵物語」、両方とも碑の題額は香川敬三皇后宮太夫、撰文を大浦兼武大臣、和歌を田中光顕宮内大臣という錚々たる顔ぶれが筆をとっている。

墓前の忠魂碑は大きさ約一畳ほどの石製で、大浦の撰文は明治三十七年十二月付けになつており、彫刻に半年ほど日数を費やして、明治三十八年五月十四日に建碑式が行われた。なお、石碑の北側には、

宮内省 若加藤義清作歌
和歌可経 寺田伊助作歌
學官院教授 納河辨次郎作曲
華英女學校教師

國母陛下の御瑞夢

附大和魂

文部省検定済

「国母陛下の御瑞夢」表紙

「君のためつくす心は死にてのち なほやまさるや
大和魂 荒木英一」

と刻まれている。日露戦争勝利の朗報とともに、荒木清勇らによる坂本龍馬顕彰の運動は広く社会に波及して、祝勝ムードに花を添えるものとなった。

前にも触れたが、明治三十一年頃、寺田伊助夫妻は荒木清勇を頼って大坂に居を構えていた。それが明治

三十七年二月に国母陛下のご瑞夢があり、五月の大浦大臣の伏見寺田屋跡探訪、六月に荒木清勇の坂本龍馬遺品を携えての大浦大臣訪問につながってゆく。話はさらに発展して恩賜金下賜から記念碑建立、唱歌の普及から、ついには他人の手に渡っていた寺田屋復活にまで展開していったが、その陰には荒木清勇の活躍と大山巖元帥と大浦大臣らの後押しがあった。

明治三十九年五月二十四日に寺田屋が復活再開している。また翌明治四十年十一月には伏見の寺田屋で日蓮大聖人のお会式が奉修された記事が残っている。

「十一月廿七日京都府下伏見町寺田伊助氏宅にて、御涅槃会を挙行せらる、京都より住本寺秋山真教師、講頭加藤道栄居士、原田浄身氏外廿余名参詣、大阪より荒木清勇居士村木証善氏等参詣せらる、其他同町有志者等六十余名にてく（中略）・・盛大なる法筵は開かれたり・・」（『白蓮華』明治四十年十二月）

これは営業再開した寺田屋で七代伊助が願主となり、住本寺住職を招いて宗祖の御会式を勤めたところ、法華講中・町会有志合計九十人前後の参列があったという意味で、とくに伏見町有志多数の参加は異例で、再開について地元の好意的な支持があったことを物語っている。

ただし七代伊助はその翌明治四十一年十月十四日に五十七歳で亡くなり、翌年九月には

妻花子が松林院の寺田家墓地に題目五輪塔の墓碑を建立、六代伊助・登勢・七代伊助の戒名を刻んでいる(注)。家業は赤字続きながら花子が続けていたようだが、これも大正九年八月十九日に没している。夫妻に子はなく寺田屋は血縁のない他人に受けつがれている。

(注) その後の寺田屋の経過については中村武生著『京都の江戸時代を歩く』文理閣刊 2008/10/15 が最も詳しく、ここではこの書を主に参考にした。考証の労を謝す。なお『住本寺旧過去帳』には、

「実得院正因信士 寺田伊助 元治元年子九月廿三日」

「喜道院妙持信女 寺田登勢 明治十年九月七日 四十八歳」

「一窓院蓮香日快信士 寺田伊助 明治四十一年十月十四日 五十七歳」

「窓香院妙華(日籠)信女 寺田花子 大正九年八月十九日 五十五歳」が記されている。

*近代化と宗門

明治三十八年は日露戦争に勝利をおさめ、日本中が喜びに沸きたった年である。しかし、一等国の仲間入りした自信とは裏腹に、戦費調達のための酷税はやがて社会の隅々にまで及び、農村は疲弊し、社会主義的な風潮とあいまって世相も大きく変貌を遂げていくことになる。また科学的万能主義や唯物主義の浸透とともに、反宗教の機運も高まり呪術的な祈祷や治療行為は迷信として指弾され、寺社縁起や伝説等は作り話として批判されるよう

になっていた。そのため伝統仏教においては、仏教の再評価が行われ、思想性や哲学的な意義づけ、合理的批判にたえられるような仏教史、文献学的な經典研究など、大学の学問を中心とした仏教研究が盛んになりだした時期でもある。

一方日蓮門下では田中智学や本田日生らが、国家主義に便乗するかたちで日蓮主義の宣伝に活躍しており、高山樗牛や姉崎正治等の知識人、東郷元帥はじめ多くの軍人が日蓮信仰の門をたたき、日蓮系各教団も次第に活気づいてきた時期である。

富士派ではようやく一宗独立は果たしたものの、新しい時代に即応した体制づくりや教学の近代化は手つかずで、封建的体質は一朝一夕に改まるはずもなかった。

また一方で急速に近代化する時代では、なんでも新しいものが尊ばれ、新奇をてらう風潮があり、なかには横紙破りの奇行の類もあって、急激な社会環境の変化と混乱の中では、高僧さえも多くの滑稽な逸話を残している。

宗門でも釈日照（加藤慈雲・日普）などはその好例であろう。釈日照は、霑師の徒弟で、伝によれば、仙台の商家の出入らしく、

「大小を帯刀して登山、自ら目師の再来と称して霑師に弟子入りを願い出たが、横柄なためなかなか許されなかったという。常泉寺に住した頃、夏冬を論ぜず合羽を着用し、その袖口に鞣し革紐をとじつけ、末端を房のごとくたらし、オイランの木履ぼっくりをはき、当

時流行の婦人用洋傘をさし、シュロの葉の団扇を手にして、悠然と闊歩、人よんでへお
 イラン坊主」という」(竹尾清澄著『畑毛日記』)
 などと紹介されている。

露師の消息中にも、しばしば加藤慈雲の横紙破りの行動に対する酷評が記されていて、
 この伝聞が本当らしいことを裏付けている。加藤慈雲はその後、キリスト教一派との法論
 で名をあげ、蓮華寺や小田原教会(弘道院)に住したあと、富士派独立後最初の大学頭に
 選ばれている。ところが明治三十九年に、宗会から不信任をつきつけられ、一時宗内は混
 乱したが、応師の助け船で沈静化した。加藤慈雲はその年の暮れに宗教事情視察と称して
 渡韓、伊藤博文総督に建白書を呈して話題を呼んだが、翌年帰国後病をえて常泉寺に没し
 ている。このような芳しからざる逸話は応師や正師にも種々伝えられていて、近年の宗門
 には法主個人を神聖視し絶対化する人々が見られるが、こうした近現代の歴史を学べば少
 しはその迷妄も覚めるのではないだろうか。

一方、教学の近代化という外圧も強まっていた。明治十一年の露志問答、同三十四年の
 対顕本法華宗との問答など、一つ間違えると宗派の存立をゆるがしかねない法論であった
 から、『大石寺明細誌』のような江戸時代の縁起伝説のたぐいの宗史・宗学では通用しな
 くなっていた。そのため堀慈琳(亨師)は常泉寺に入ると、合理的な批判にたえうる宗門

史を再構築すべく、古文書の調査研究に本腰を入れて取り組んでいた。

こうしたおり、荒木清勇もこれまでの法論の経験から、本宗の戒壇御本尊の顕彰とその遮難こそ急務と考えて独自に教義研鑽を続けていたのであった。

たまたま明治三十九年の春、東京常泉寺に参詣した日に御書講があり、清勇も講演を申し入れることがあった。堀慈琳や有元広賀、山田・由井・平田ほか多数の居並ぶ前で、「本門戒壇の大御本尊」という法談を行った。その内容は、

①大聖人の通途の御本尊は順縁の僧俗個人に授与されたもの。大石寺の戒壇御本尊は末法万年のために残されたもので、一閻浮提の順逆両縁の一切衆生に総与せられた。

②戒壇の本尊は大聖人のご当体で、滅後にご法魂を移された。

という趣旨で、他門の戒壇御本尊に対する批判の反論と会通を試みたものである。ちなみに、現在の宗門でも大石寺の戒壇板本尊を「一閻浮提総与の御本尊」と尊称しているが、この荒木清勇の論説が、総与という呼称の最初のものと思われる。

この論説は、明治三十九年十一月の『白蓮華』（宗門機関誌）に発表されたが、その後住本寺の大講師加藤道栄から、法魂滅後移転説をめぐって厳しい批判にあい、論争往復すること一年余、その間、堀慈琳、富士本日葵、小笠原慈聞、由井一乗らを巻きこんで侃々諤々かんかんがくがくの筆戦が展開された。しかしあまり長期にわたったためか、編集者から論争の掲載中止を

告知されて結論を見ないままに終わってしまった。あるいはこの時、徹底的に論争することによって、その後の宗門の本尊観も、また違った展開があったかもしれない、残念なことはあった。

*富豪の夢と挫折

明治三十九年は戦勝気分で一時的には好景気となり、株式相場もバブル状態で、多くの成金が生まれた。しかしそれは長続きせず、巨額な戦費の負債は国民につけ回された。ために農村の疲弊や失業者の増加等、戦争の後遺症はすぐにあられ、明治四十年に入ると株価が暴落し、倒産も急増している。小林一三などもこの頃、証券会社設立に失敗して一時路頭に迷ったが、その後は箕面有馬電気鉄道（阪急電鉄の前身）の計画に転じて成功している。

当時、米相場師の多くが株取引に転じていたといわれるが、清勇もまた天一坊事件以来、堂島の米相場から北浜の証券取引に転身していた。これまで大きな挫折を経験したこともなく、順調に財をなしてきた清勇は、このバブル崩壊の時に強気で買いに回ったらしく、たちまち約六十万円（現在の約四十億円）もの巨額な損失を出してしまった。日本経済を過信したのか、買い方一本で、気がつけば資金全部をつぎこんでなお負債が残り、首が回

らないほど深手を負ってしまった。

窮地に追い込まれた清勇は出処進退に迷い、ひそかに御本尊に祈願するつもりで、夜行列車に飛び乗り、ひとり大石寺に向かったという。昼頃ようやくたどりつくや、たまたまその頃山門前で占いを営んでいた易者が、悄然と歩いてくる清勇を見かけ、手招きして呼び止めた。よほど深刻な面相をして歩いていたのだろう。そして、詳しい事情も話さないのに、清勇の顔をみるや「あなたは、すぐにも家に帰った方がいい」と強くすすめたという。清勇は、これは何か御本尊のお告げかと思ひ、わけもわからないままに山門前で題目三唱するや、すぐに大阪にとって返した。するとそこには客人がまっていた。

その頃、阪神間は開発ブームで、西宮の鳴尾浜に競馬場を開設しようという動きがあった。日本の競馬は、明治六年、イギリス人の団体が横浜根岸競馬会を設立運営したことがはじまりであるが、明治三十九年になってようやく日本人の手による競馬が開催されるにいたった。それが池上の東京競馬会であった。そこで関西でも競馬をということになり、この機を逃さず地元有力者が運動を開始した。ところがなかなか政府の許可が得られず、相当な資金を投入していたにもかかわらず計画は暗礁にのりあげてしまった。

このとき荒木清勇宅に訪ねてきていたのは競馬場の発起人達、すなわち政商の岩下清周、久能木宇兵衛、大林芳五郎や西宮の井戸元・前田庄介らであると思われる。

彼らの用むきというのは、政府筋の仕事を依頼するためであった。「ここは荒木さんに頼むほかない」ということで、世話役が揃って訪ねてきたようである。何でもかなり多額の謝礼金を持参してきたという。

もちろん清勇は快諾し、すぐに上京して大臣に面談を申し入れ直談判に及んだ。その効あつてか、直後の明治四〇年六月に鳴尾競馬場の認可がおりている。関係者が愁眉を開いたことは言うまでもない。清勇も、この時の多額のコミッションによって、相場失敗による破滅からかろうじて助かったのであつた。また後日談として、大臣に面談のおりに座布団の下に金包をしのばせてきたことを家人に語っている。

鳴尾競馬場は大林組が突貫工事での年十一月十七日に完成させ、はやくも最初のレースが開催されている。またこの競馬場は、その後さまざまな経過をへて、阪神競馬場や甲子園球場、鳴尾ゴルフクラブなどに発展している。競馬に鳴尾記念という冠レースがあるやに聞くが、これを記念したものと思われる。

清勇が相場で六十万円の損失を出した頃、北浜の相場師のなかで勝ち残ったものでは岩本栄之助が有名である。彼も日露戦争後の熱狂的な相場では巨額の利益を手にし、その後暴落もうまく切りぬけて莫大な財を築くことができた。絶頂期の頃、実業団の米国視察旅行に参加して、彼の地の富豪などが公共事業等に多額の寄付をしていることを知って、

明治四十四年に大阪府に百万円（現在の約六十億円）で中之島の中央公会堂を寄付している。しかし、この岩本も大正五年の相場失敗で追い詰められ、この公会堂の完成を待たずにピストル自殺して終わった。相場の世界で成功した伝説上の人物は、この他にも数多くいるが、いづれも最後には失敗して没落するのが通例で、この世界の厳しさをものがたっている。

岩本の訃報を聞いた荒木清勇は、「自分も財産のあるあいだに何かまとまったものを寄付しておけば良かった」ともらしていたというが、しよせん後の祭りであった。

清勇はそれでも一攫千金の誘惑からのがれることが難しく、その後も再起を夢見て何度か相場に手を出すがあったらしい。何でも妻のきぬが「旦那さん、もうやめておきなはれ」と袖を引いて制止するのも聞かず、少々元手ができると、つい相場に手を出すことがあったという。そして買えば下がる、売れば上がるという状態で、再びかつてのような金運はめぐってこず、財をなすことはなかった。もう株式相場も複雑かつ大資本の世界になって、個人のカンと度胸で荒稼ぎできるような時代ではなかった。

晩年に清勇はこう述懐する。「信心さえすれば金儲けはできるものと心得て、勤儉力行という人道欠くべからざる要件をおろそかに思うようになりました」と、また投機という虚業へ走ったことへの反省を記している。

*大阪北区の大火

災難は忘れた頃にやってくるとはよくいったもの。東洋のマンチエスターと呼ばれるほど急速に発展中の大阪中心街に大火災が起こったのは、明治四十二年七月末のこと。これは明治期最大の火災で、北区の天満、曾根崎、老松町、堂島、梅田、北新地、上福島まで延々二十六時間にわたって約二万戸を焼き尽くしている。『白蓮華』（明治四十二年八月号）の記事には、

「・・・本宗信者として熱烈の間こえある蓮華寺檀徒の、その類厄にかゝれる約六十戸の多数にありし事なり、その中には、かねて誉れ高き荒木清勇、牧野敬本、居田蓮清、村木證善、後藤眞道等の諸氏もありしは寔に痛歎の至りである、中につき損害の最も大なるべきは静観楼牧野家なるべく、十数棟の大厦小楼の僅かに裏手の洋館を残すの外、三棟の土蔵什器衣類まで烏有に帰し、その上金銭づくにて買へぬ庭園内の樹木を枯死たる也。」

次は居田氏にて数代連属せる邸宅及び周辺の家作の全部を失ひたる、されど土蔵四棟の内三棟は厳存せる事は不幸中の幸なり、その他諸氏それ相當に損害あるべく、されど流石は信者揃いにて御本尊は勿論安全に持出されしは感すべき事ども也、・・・」

とあり、蓮華寺は類焼を脱れたが、多くの檀徒が焼け出されており、早速、翌三日には本山から応師一行が見舞いに訪れたこと、全国の寺院・講中から義捐金が寄せられたことを報じている。勿論、縁故者の多い源立寺講中からも心からの見舞いが講中に届けられている。また、蓮華寺内には、火難から脱れた御本尊、仏壇、長持等を一時的に預かり、本堂内廊に並べられた仏壇には、毎日家人がお給仕に訪れたという。この時、清勇も避難した御本尊数幅はじめ重要書類入りの長持を預けている。

*長男好平の帰国と出家

相場の失敗と自宅の類焼で、一家の経済基盤も大きく揺らいだため、長男をいつまでも米国で遊ばせておくわけにはいかなかった。そこで、清勇はいつまでも帰国しようとしてない好平を連れ戻すべく、次男の隆平を渡米させ、明治四十年秋にようやく好平が戻ってきた。好平もやはり蛙の子は蛙らしく、本宗の信心と教学は父親荒木清勇ゆずりの強いものがあり、彼の地でも一般仏教や宗学を独学で学んでいたようである。それは帰国直後、副重好平の名で『白蓮華』誌に「宗祖の主師親を論ず」と題する投稿を載せていることである。

しかしこうなっては好平を浪人させて置くわけにはいかない。好平の就職口を探すこと

になった。その後の好平は、同年に韓国統監府参事官に任用され、韓国統監曾根荒助（子爵）に従って渡韓している。推測するに、伊藤博文が初代韓国統監であるから、清勇が長州閥の縁故をたよって採用を依頼したものと思われる。

当時の日本で「シカゴ大学政治学科卒」という肩書きは、官僚として奉職するにも最高のアドバンテージとして通用したはずである。けれどもわざわざ海外に新天地を求めて参事官外交官の道を選んだことは、好平の米国滞在の国際的視野と、近代主義を超克するための和魂洋才の理念を懐いてのものと思われる。それは、日本の社会に道徳的な頹廢や拝金思想をもたらしつつあった欧米化への反動として、東洋主義的な理想が高まっていたことと無縁ではない。

しかしその年の十月二十六日、伊藤博文が安重根によって暗殺されるという事件がもちあがって、好平の幻想は崩れたようである。米国で自由の空気を吸い、アジアに王道楽土の建設を夢見て渡韓した好平であったが、そこで目にしたものは、植民地支配の現実と、韓国併合の方針に抑圧された朝鮮民族の姿であった。

明治四十三年になって、好平はにわか参事官の職を捨て、出家の道を選んだ。日蓮大聖人の仏法にこそ近代社会の諸矛盾を解決する哲理が含まれているとして、これを学び、再生する道を志したのであった。この時の、官を辞するにあたって韓国統監曾根荒助から

はなむけに贈られた揮毫が今でも子孫に伝えられているという。

好平の出家はすぐに許され、正師の弟子として得度することになった。道号を照平と授かり、簡素ながら得度式が行われた。時に二月十八日、満三十二歳になっていた。

ちようどそれから半年ほど遅れて達師（細井精道）が八歳で得度している。

「本日は、当寺初代扶桑阿闍梨照平房日等大徳の三十三回忌を住職が執行致しました所、大勢御参詣下さいまして、ありがとうございます。」

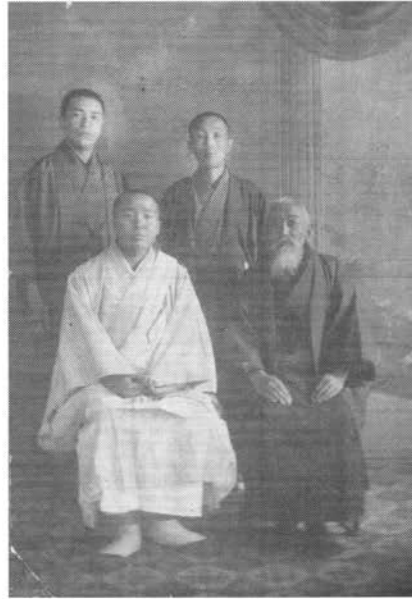
この照平房は私の兄弟子になりました、総本山第五十七世日正上人の二番目の弟子でございます。この人は明治十一年に生まれたのでございますから、数えて百年、今生きておれば百歳ということになります、若くして政治家になるつもりでございます、同志社中学へ行きました、同志社中学四年終了した時に渡米致しました。

明治三十二年、米国のシカゴ大学の政治科へ入学しました。それから其の後、四、五年米国の中西部のシカゴとかセントルイスとか、あの辺の商工業を見て歩き、遂に明治四十年に帰朝致しました。それから又、朝鮮へ行きました、やはり政治の事でぶらぶら廻って参りました、遂に政治も飽き足らず、仏道に志したのであります。

勿論それは、父が荒木清勇という方で、その当時本宗でなかなか仏教に於いて勝れた方でございますが、その方の子ですから、遂に心機一転して坊さんとなって、仏道修

行したい、という志を立てまして、明治四十三年の二月でしたか、総本山へ登って、師匠・総本山五十七世日正上人の弟子となったのでございます。それが四十三年二月。そして六カ月経って、私も小僧として本山へ上がりまして、丁度六カ月ばかり前の先輩ということになります。歳は随分違います、二十五も違います。そして仏教を非常に良く勉強なされまして、又米国に行っておりましたから英語もよく出来ました。当時あの上野の本山の周りで、中学へ行っていた人は皆英語を習いに来たものでございました。それから仏教も非常によく勉強せられておりました。」(『妙静寺史』)

新発意の得度者といっても、シカゴ大学出身のキャリア官僚という前歴といい、総講頭荒木清勇の長男といい、田舎の本山では大きな驚きをもって迎えられたようで、沙弥時代も異例の扱いとなった。通常貫首の弟子として得度した者は白衣小僧として大坊に在勤する習わしであるが、まさか小僧と一緒にお経の読み方から学ばすわけにもいかなかったように、とりあえず荒れていた浄蓮坊の留守居にあてられ、休校状態だった富士学林に代わって、所化小僧に宗学・英語等の教授をすることとなった。前述の達師の懐古談はこの時期のことであるが、同年八月十二日に八歳で小僧に入った達師と照平房が兄弟弟子でも大坊と一緒に修行生活を送ったことはない。無住だった浄蓮坊に在勤し、一年余りで准訓導・住職の辞令が下りている。いわば二階級特進のようなものである。



左から福重隆平、照平房、不明、村木証善

一年半、ここで在勤奉公したことになる。

ところで、高級官僚への出世街道を捨てて出家した長男を、父・清勇はどのような思いで受けとめただろうか。彼の人柄や信念から想像するに、おそらく両手をあげて賛成したに違いない。すでに世俗の名聞利養の空虚さを充分に味わいつくし、余生を仏法流布に捧げる心境に達していた清勇のことである。息子が出家して宗門に入り、自分の願業を共に担ってくれることはこの上ない喜びであっただろう。また、照平はおよそ物事にこだわらない無軌道な性格だったことでもあり、その改心を喜ぶとともに心機一転しての精進・修

それは浄蓮坊安置の大聖人御影像・台座と御厨子には、正師の筆で明治四十三年七月荒木清勇が願主となって大修理を加えたと記録されていることから証される。住職の辞令は翌年四月だから、それ以前から留守居の形で住んでいたことになる。それも同裏書きに「照平房代」と記されていることでも明らかである。したがって福重照平は翌四十四年十一月、北九州の八幡教会に転じるまでのほ

学に心より期待していたようである。

そのことは、明治四十四年十一月に、大石寺六壺の御宝前に宣徳銅三具足（花瓶・香炉・燭台）を寄進していることでもわかる。荒木家の家計が窮屈な中にもかかわらず、清勇の心からの御供養であった。この十一月という時は、照平が浄蓮坊の住職を辞し、最初の任地八幡教会に赴いた時でもあるから、その記念の意味が込められていたのであろう。

また、話は前後するが、福重照平が出家したその翌月、明治四十三年三月一日に荒木清勇も登山している。その時、正師と御対談の上、戒壇御本尊の内拝（開扉）が随時行われる現状を憂慮し、自らが願主となって毎月二十八日に戒壇御本尊の月並開扉を願われた。正師はこれを快諾し、早速三月二十八日から実行している。（後に十三日に変更）。この月並み開扉の趣旨について、亨師は次のように記している。

「開山上人は、これを弘安二年に密附せられて、正しき広布の時まで苦心して秘蔵せられたのであるが、上代にはこのことが自他に喧伝せられなかったが、いずれの時代（中古か）からか、遠き広布を待ちかねて特縁により強信により内拝のやむなきにいたり、ついには今日のごとき常例となったのは、もったいない事であるから、四十余年前には、有名な某居士が懇願して月一回という事にもなった事があつたが、永続しなかつた。」

（『日興上人詳伝』二七七頁）

その足跡の一端を記すと、

○明治四十三年三月十三日、東京芝俱樂部にて独一本門講主催大演説会。荒木清勇、中心弁士として出張。

○同年五月十五日、川崎登戸でも布教演説会を開催。

○明治四十三年六月七日、正師を招請し玉出の荒木宅で法要を勤める。

○同年、徳島敬台寺復興に尽力

○同年十月十二日 法道会十周年記念大会

○明治四十四年七月二十二・二十五日、東京桜橋錦亭の演説会に弁士として登壇。

○明治四十五年春、讃岐法華寺後住問題で牧野氏と調停に入るも不調におわる。

○同年四月七日、神田松月亭に大演説会。

この他に寺院や個人宅での講演・談話等は数知れない。

ここでは資料不足のため、荒木清勇が法華講全国総講師の任命を受けた日を明らかにすることができないが、恐らく明治二十年後半には応師から辞令が出ていたと推定される。

荒木清勇の人物たるゆえんは、家業の失敗にもめげず、むしろ実質的に総講師としての重責を担って、なおいっそう正法興隆・宗門外護の活動に専念していることである。それもけて経済的に余裕があつたのことはなかつた。よくありがちな檀那衆の名誉職ではな

かったのである。

とりわけ、この時期の功績としては明治四十五年「日蓮宗富士派」から「日蓮正宗」へ宗名改称に功があったことがあげられる。

当初は大石寺派から内務省宛に、「大聖日蓮宗」と改称のための認可申請書を提出していたが、途中から「日蓮正宗」名で申請し直していた。当時の読売新聞によれば、これに反発した日蓮宗が内務省に反対を表明して抗議書を送っていたため、「改称は不認可になるもようなり・・」(注)と見られていた。そこで荒木清勇が内務省との交渉の任にあたり、要人に面談を申入れて陳情して回ると形勢は逆転し、六月七日、はれて「日蓮正宗」という宗名の公許が得られ、一門は喜びにわいた。

その慶祝ムードの中で清勇もまた宗名改称を慶祝し、早くも同年七月には入門書『日蓮正宗』を發刊、数千部を各所に施本として配布している。執筆から出版までの仕事の量を考えれば、その手際の良さには驚かされる。この書は大正期の日蓮正宗の教義・信仰の基本書として多勢の人に愛読された唯一の本であった。

また同年六月十五日、正師は全国総講頭の荒木清勇に対し、これまでの功績を称えて「四十年一日の如く護法扶宗に熱誠を捧げ宗門内外重大件ある毎に必ず折衝の労を厭わず貢献せらるゝ事多大にして法勲最も顕著なるをもって」(『白蓮華』)として賞与の御本尊を授

与し、同時に由井一乘を全国大講頭に任じて大本尊を賞与、山田善兵衛には東京総講頭に任じて大本尊を賞与している。

また宗名改称認可の喜びの余韻もさめやらない七月三十日、明治天皇が崩御され、それに伴って年号も大正と改元された。諒闇中ではあったが、日蓮正宗は法主・管長が阿部日正ということまで元号・宗名・法主・管長名、三つ揃って「正」とは幸先良いと宗門は大いに意気があがったものである。

(注) 明治四十五年四月二十日読売新聞「日蓮宗富士派改称運動を起す」より。但し、「日蓮正宗」名をめぐっては、明治十二年三月の興門派宗号改称の討議では要法寺案として提出されて否決された(『本宗史綱』)。

その後、明治二十二年に「日蓮宗興門正統布教会」が発足するが、明治二十四年七月発刊の施本『真の教』には発行所を「東京本所区小梅常泉寺内・日蓮正宗布教会本部出張所」として、改称認可より二十一年も前に名称を用いている例が見られる。

*宗名改称式

日蓮正宗の宗名改称申告式は大正元年(明治四十五年)十月二十日から三日間にわたって、御会式をかねて奉修された。全国各地から参集した一千余の檀信徒が、記念修復事業によって朱色もまばゆく新装なった三門をくぐった。

大法会は二十日午後二時、大客殿にての明治天皇奉悼会にはじまった(注一)。式典は時代を反映してか、大宮警察署長、上野村役場、上野尋常小学校の教師・生徒数百名なども、遠国の登山者一千余名にまじって参加しており、大石寺が地域社会に密着した存在であったことをものがたっている。

二十日夜、御堂にて信徒有志および青年僧侶による演説会、二十一日未明(丑寅)勤行衆会、終了後一同に斉飯饗応があった。

同日午後二時、宗名改称申告式は御宝蔵から戒壇御本尊を大客殿に遷座することにはじまった。これは、引き続き参列者一同が戒壇御本尊内拜の御開扉を受ける便宜を考え、事前に大客殿の須弥壇に遷座し、宝篋のまま安置したものである。この頃、大法要の際にかぎって、狭い御宝蔵から御堂や客殿に戒壇御本尊を遷座して御開扉していたものである。

引き続き、三法主・隠尊はじめ大衆一同出仕し、勤行唱題が謹修された。その後、はじめに法主・管長の正師から宗名改称について「ご挨拶」、ついで総講頭荒木清勇から「経過報告」があった。『白蓮華』誌に報じられた記事によれば、

「・・・宗名改称申請公許について、経過報告を本宗総講頭荒木清勇居士うけたまわり、おもむろに壇前に進み、莊重謹嚴の態度、簡明適切の言語、しかも音吐朗々、経過の終始を演説す。満堂さながら水をうちたるごとく、聴衆感にうたれて歎歎(きよき)(「すすり泣き」)

するものあり。大拍手万歳声裡に演了。・・」

と、荒木清勇に敬意をこめて描写している。

ついで、賛辞朗読・本宗評議員会座長土屋慈観（柱師）、

祝辞・本宗宗会代表坂本要道師、祝辞・塔中兼末寺総代阿部法運（開師）、

祝辞・総本山檀家総代渡辺登三郎、祝辞・本宗大講頭兼東京独一本門講頭由井一乘

祝辞・京都総講頭加藤道栄、祝辞・大阪総講頭牧野敬本、

祝辞・名古屋遠露会幹事岡本忠次郎、祝辞・東京日本橋広布講頭岩瀬弥市、

祝辞・東京京橋本門講代表後藤亮之助、祝辞・東京浅草本因妙元講頭山口栄寿、

祝辞・法道会妙典講頭金子鐵次郎、祝辞・法道会妙道講頭内野金次郎。

と、つぎつぎ壇前にすすみでて朗読し、ここに申告式の部を終え、引き続き本門戒壇御本尊御開扉が行われ、また元のごとく御宝蔵に還御して式典を終了した。

その後、大書院・庫裏・対面所・六壺等すべての広間を利用して参列者に清餐が供された。全国の僧俗が集まったの祝賀の清宴は、かつてないほどの多人数で、後々の語りぐさとなつている。

引き続き御大会式の部で、同日午後七時からはお速夜法要、翌二十二日午前十時から御正当会が奉修され、その後造初御影およびご灰骨の拝観があつた。午後二時からは大客殿

に場所をかえてご生骨内拝、午後七時から御堂で前法主日応師の御書講が開筵され、お花くずしをもって終了した。

なお『白蓮華』に掲載されているこの時の清勇の経過報告の末尾らしきを紹介する。

「恭しく惟るに、たとい善たりというといえども、義分あたりといえども、まず名を忌むべしとは、宗祖大聖のご金言なり。それ富士とは善美の名にして、興門とはその義分おおいにあたり。しかりといえども各々派名の加わるをいかがせん。あにこれを忌まずして可ならんや。いまやその忌むべき派名を除去し、日蓮正宗と公称するに至りしは、ひとえに宗祖大聖のご利益にして、たとい一文不通の鈍夫愚婦たりとも、一言のもとに、宗祖の正統正意は本宗に存することを容易に弁知せしめたもう大慈大悲の聖慮たりと確信す。不肖清勇、本日の盛典に陪するの榮をえ、感激にたえず、いささか蕪辞を陳し、もってつつしんで奉祝す。

大正元年十月二十一日

日蓮正宗総講頭 荒木清勇 九拜」

永年にわたって奔走してきた労苦が報われ、名実ともに一宗門としての体裁がとどえられたことに、清勇は感慨無量であったにちがいない。しかし、そのご奉公の成就もひとえに日蓮大聖人の慈悲の賜物との言辞に、彼のあつい渴仰心を知るのである。また、大正

天皇即位式に協賛して、由井一乗の特志によって『日蓮大聖人』（大正四年十一月刊）戒壇御本尊の真影（写真）を天覽に供したらしく、さらにこの写真が後に、熊田韋城の『日蓮上人』や荒木清勇の『聖教の正義』（大正四年十一月刊）の巻頭をかざり宣伝された。当時は今の宗門のように、戒壇御本尊は何が何でも信徒以外は内拝させないというような頑な姿勢はなく、むしろ一閭浮提総与の本尊として、おおらかな態度で宣揚に努め、貴顕紳士や高名の学僧が登山すると未信者でも拝観させることがたびたびあった。

荒木清勇も、一般の宗教誌『法華』に「希望」という題で寄稿し、「戒壇御本尊と佐渡始頭本尊やその他の本尊を公開し、公平な立場で真偽を決して、宗祖の本懐のご本尊を定めよう」との提言までおこなっているぐらいである（注2）。

ところで、この宗名改称申告法要に際し、荒木清勇はさきに紹介した著書『日蓮正宗』を施本として数千部印刷し、参拝者一同にも記念として配布している。その他、由井一乗は『総本山真景写真帖』、山田善之助（善兵衛の子息）は『日蓮正宗御戒壇之由来』、『先師国諫状』、岡本忠次郎は『遠露会主旨並びに会則』なる印刷物を記念品に配布されている。当時は、篤信者が布教用冊子を多数印刷し、無償で施本して法華講衆以外にも無縁の人々への結縁を願うという功德を積むことがしばしば見られた。このような施本のご供養という美風は受け継ぎたいものである。

なお、三日間の大法会をおえた荒木清勇は、この期を逸せず、喜びの熱の冷めぬうちに、本山総代の渡辺登三郎のあっせんによって大宮町の花咲座という劇場を借りきって大演説会を開催している。これは二十三日午後七時から、

・灯台下くらし・荒木清勇居士

・所感一束・由井一乘居士

・日蓮正宗・土屋慈鑑院(柱師、当時学頭)

の三名の弁士によって、現在の富士宮市内中心部の町民を対象に布教を意図したものである。当時も現在も、市内中心部は日蓮宗身延派や日興門下他山の檀信徒が多く、けして縁とはいえない。かねてこれを憂っていた彼の願いは、まず地元の人々にこそ、このありがたい宗旨をわかつてもらいたいという一念であった。あいにく祭日と重なって百五十名ほどの聴衆であったが、この演説会で帰依する者が三名あったことが報じられている。

(注1) 宗名改称は明治四十五年六月七日に認可が下り、八月に奉告の大法会を予定していたところ、七月三十日になって明治天皇が崩御され、大正と改元された(没年六十一歳)。諒闇中のため大法会は十月に延期されていた。

(注2) これについて戦後三十年代の創価学会の進出により、他宗他門からの偽作説がうるさくいわれ、この写真が流布されたため、宗門と学会はこれを嚴重に秘し、御本尊を写真にとることまでも謗法としてタブー視するようになった。けれども初期の頃の聖教新聞等には御本尊の写真が堂々と載せられているのであ

るから皮肉なものである。近年、宗門と学会の抗争により、再び真偽問題が取りざたされているが、真摯な対応がなされず、政治的かつ宗派的なタメにする主張であり、問題解決にはつながつていない。

＊蓮華寺の祝融と再建

明治憲法に信教の自由が保障され、僧俗一体となった布教の時代を迎えて北野蓮華寺や池田源立寺も寺基を確かなものにしてきたことはこれまで述べてきた。ところが、明治四十四年二月二十日、蓮華寺は白昼突然の失火で総樺造りの本堂・庫裏を全焼し、御本尊・聖教のすべてがわづかな時間で烏有に帰してしまった。火災の原因ははっきりしないが、命日の塔婆供養で廻向の後、ロウソクの火をそのままにして庫裏に下がり、その二、三分の間に燃え広がって約一時間半で焼け落ちたという。惜しむらくは威容厳然として生身の大聖人を彷彿とさせたという本堂安置の大御影および元源立寺旧蔵の大聖人御真筆本尊を失った事である。単独の火災で類を他に及ぼさなかった事だけがなぐさめだが、取り返しのない事態に時の住職（信本慈道）は責任を感じて辞職・還俗している。

菩提寺を失った檀信徒一同にとっても晴天の霹靂、その驚き、嘆きは『諸記録』中の松本佐蔵らの消息にも記されている。荒木清勇の悲嘆もまた一通りでなかった。さきに相場の失敗で巨財を失い、いままた心の拠り所として外護を尽くしてきた菩提寺の焼失という

憂き目にあい、失意の底に落とされた。

しかも落胆したのはそればかりではない、二年前の北区大火で堂島の自宅が類焼した際によつたのことで持出した長持も焼けてしまっていた。蓮華寺に預けおいた長持一棹には御本尊類及び貴顕方の書など家宝ともいふべき書軸類がぎっしり入れてあつたのだつた。鎮火後、灰燼に帰した跡を見届けて帰る清勇の後姿は、端から見るのも気の毒なくらい悄然としていたと記録に残っている。それでも自らの宿業のつたなさ、信心の至らなさとなえ、深く懺悔する清勇であつた。

ところが、翌日清勇の命により、手代の牛尾吉平が長持の置いてあつた場所を灰掻きしている、長持そのものは一切焼失していたが、灰の中から何と御本尊箱が数個が現れたのである。それは清勇の為宗為法の功労に対し露師・布師・応師より授与された賞与御本尊で悉く無傷で掘り出されたのである。箱こそ多少焦げたものもあつたが、御本尊には水一滴もかからず元のまま取り出され、居合わせた人々からも感歎の声が上がつたという。もとより災難にくじけてしまふような清勇の信心ではなかつたが、この時ばかりは蘇生する思いをしたという。「我れ並びに我が弟子・諸難にも遭え、身命を期とせん」との借金言を胸中に思い浮かべては己れを言い励ましたに違いない。逆境をバネに、さらに布教に、講演に、著述に奔走する日々であつた。

その後の蓮華寺は源立寺住職の鈴木慈弘を兼務事務取扱に迎え、中光達や牧野敬本・居田蓮清・馬場広藤らの総代を中心とし、講中あげての再建に取り組んだ。

翌々大正二年四月二十八日には、はや本堂が竣工している。落成式における式次第では中光達の工事報告、来賓僧侶五師による祝辞、荒木清勇の祝詞演説、総代三氏の祝辞、住本寺講中からは加藤道栄および大西広栄が祝辞をのべ、源立寺講中からは石田與が代表祝辞を述べた。勿論両講中からも微力ながら応分の募財があつたことはいうまでもない。

ついで土蔵、庫裏、荘厳仏具などが順に完成、大正四年十二月三日はれて落慶式を奉修している。工費約二万八千円、本堂建坪六十三坪、庫裏八十三坪の旧観をしのぐ再建となつた。総責任にあつた中光達の報告によれば、

「・・起工より此に至るまで、実に四閏年、三十ヶ月なり。この間寺主をはじめ心身を労役して、勸財に奔走するもの、衣食を薄くしてこれに応ずるもの、工事を督励するもの、庶務を処理するもの、みな至誠一貫もって事に従わざるなし。いささか仏恩の万一を奉謝するに足るべきか。・・」

と、この事業が文字どおり講中一丸となつて寢食を忘れてのご奉公だつたことを窺わせている。

また、一切の重宝類を焼失したため、この時、多くの僧俗に新たな寺蔵什宝として御本



再建された蓮華寺（戦前）

尊・聖教等の寄進を受けているが、荒木家からは布師の常住御本尊、露師の書幅、また後に、伝日興上人の御本尊を納めている。

ところで、この蓮華寺再建の財政面は、中光達がその三分の一ほどを負担し、また有力檀越数名で大半の寄進を行って見事な復興を成し遂げたが、貧富や御供養金の多寡にかかわらず、平等にその志をご本仏大聖人にお供えするのが当宗の美風である。数千円の多額御供養の篤志家も、十銭寄進の老婆も、ともにご本仏の弟子檀越として、その志しを賞められるのである。

けれども、全国総講頭の重職にある荒木清勇にとって、この時ほど御供養すべき財物のないことをもどかしく思ったこともなかった。還暦を迎えた清勇は、大聖人へのご奉公は、わが手、

わが足、わが口、わが身をもって供養する他はないとの思いを再び強くするのであった。

*源立寺講中と宝塚演説会

大正二年十一月九日には宝塚にあった日宗正道会と荒木清勇が対論することになった。ことの起こりは日宗正道会の会員だった婦人が日蓮正宗に改宗したところ、これを阻止せんとする思惑より、教義研究の名分で来会を申入れてきたため、法論の約定となった。当初は正道会側が三名の弁士を立て、正宗側は荒木清勇一名のみとの条件を通知して来ながら、当日赴いて見ると、正道会側は東京目黒に本部のある上部団体・師子王会から松野顕佑が出張してきて、これを対応策としてきた。それも問答法論はせず、それぞれが自説を演説して、優劣は聴衆の判断に任せようというものだった。正道会側はリスクをとったようである。二時半から籤くじで前席となった松野の演説が始まり、四時過ぎ後席の清勇が開始する頃には源立寺や西宮の講中からも三十数名が来会して傍聴している。清勇は約一時間半にわたって本尊論を演説し、法界本尊説に一撃を加えている。

その後、松野は機関誌の『獅子吼』誌上で毎回、事実を歪曲したり、悪口誹謗をくり返したため、その真相を「宝塚立会演説の顛末」として『白蓮華』誌に発表、「藪蛇」「負け

犬の逃げ吠え」「宣言書」「獅子吼駁撃(1)、(2)」として『獅子吼』の批判論説に逐一反論している。松野の論説は狷介にして御書の引用を間違えたり、理観を主とする法義等、清勇の指弾の前に劣勢を免れなかった。

これより先、荒木清勇は池田田中町の石田與蔵を教化していた。石田は鍼灸院を業とし、また鍼灸師の集まり信義会を組織し、会長として後進の指導に当たっていて人望もあった。この時期には講中代表格で、かつて妙見信仰をしていた時の友人でもあった西宮の島谷宗吉を教化し、その後小田・上田・中森・今井らの新加入の同士をえて西宮正宗講を組織、毎月二度、源立寺住職とともに石田與蔵が通って布教していた。そこで大正四年五月三日



大正期の源立寺山門

と十四日、大演説会を開催することとし、楽隊を雇って宣伝につとめたところ、会場の庭先から路上にまで人があふれ、大盛況となった。その時の登壇者は、石田與蔵・牧野敬本・福重照平・阪本要道・小笠原慈間・荒木清勇・土屋日柱らである。

*大正デモクラシーと日蓮門下

日露戦争後から大正末年にかけて盛んになった自

由主義かつ民主主義的な風潮は、大正デモクラシーとして誰にも知られている。こうした気分が仏教界にも影響したのである。この時代は、日蓮門下も新たな展開をみせ、最も盛んな時代を迎えている。それは、宗派や封建的形式にとられない、新たな運動の盛り上がりであり、実証的な文献批判や、合理的な日蓮教学の再構築であった。

まず田中智学が、旧来からの日蓮宗の信仰と体質に飽き足らずに還俗し、摂受主義や雑乱本尊を批判、在家主義の国柱会を組織して国体思想と合体した日蓮主義を提唱、講演会や出版活動・文芸運動等を通じて軍人や有識者から多くの支持者を得て、広く社会一般に浸透している。とりわけ、このころから田中智学の高弟山川智応がでて、精力的に研究・発表し、『本化聖典大辞林』をはじめ多くの著作は宗学・宗史両面に大きな業績を残し、宗派をこえて日蓮門下全体に多大な影響を与えると同時に、社会的にも高く評価されている。

また顕本法華宗の本多日生らも浅草に統一閣を作って日蓮主義の伝道と社会教化に活躍、政治家や軍人など著名人を教化し、日蓮門下の統合運動の主導的役割を果たした。さらに日蓮宗からは清水梁山が教学の刷新と門下統一を主唱して宗派を超えた活動を試みている。その一方、日蓮宗大学（後の立正大学）でも、日蓮宗系の教学の刷新を計り、宗門史などの実証研究も活発になって『日蓮宗宗学全書』の編纂が始まる。在家では山田三良

・小林一郎・矢野茂らは一般人の立場で日蓮主義の有識者を募り、法華会を組織し『法華』誌を発刊するとともに大聖人御真蹟の護持に努めて中山の聖教殿を建立している。

一方、昭憲皇太后は日蓮信仰を持っていたという雑誌記事もあり、皇室や宮内省にも法華経・日蓮信仰者がでて、この後に「大士号宣下」を推進する力になったと思われる。

こうした状況の中、富士門流の諸山も、お伽話や神話・伝説のような歴史観からの脱皮をせまられていた。大石寺では亨師が『富士宗学全集』の編纂を企て、要法寺系の富谷日震、北山系では本間俊明らが、互いに交流しながら、各山の秘庫を開いて古文書の蒐集・研究にあたるようになった。

これまで教義と伝燈を異にして垣根を高くしていた各山が、一様に門戸を開き始めたのは、急速に変化し近代化する時代にあつて、支持基盤を失った教団や教学を社会に適應していくには、我田引水式に潤色されてきた門流の歴史を、公正な批判に耐えうるものに再編する必要に迫られていたからである。また、新たな布教を展開する上でも合理性を有した主張を展開しなければならなかった。

大正デモクラシーという、リベラルな時代の雰囲気は、各派間の自由で活発な交流を生みはじめ、稲田海素ら日蓮宗宗学者が大石寺御宝蔵の真蹟重宝類を調査にきたり、亨師が身延文庫を訪ねて数日間滞在し、島智良の好意で文書・典籍等の蔵書類をかなり自由に調

查させてもらったりしている。さらには亨師は大正末年から池上本門寺の宗務院の一隅に寄寓し、立正大学で数ヶ月にわたって日蓮正宗史の特別講義を開講している。

また、大正三年十月、日蓮正宗の阿部日正、日蓮宗小泉日慈、顕本法華宗本多日生ら三管長が発起となって、日蓮門下の統合問題が話し合われ、翌年には、七教団の代表者が一堂に集い、統合におけるの会合や講習会開いたりしている。この運動は間もなく立ち消えになったが、この統合問題が、大正十一年の立正大師号宣下の運動につながっていった。

＊『日宗新報』誌上法論と『聖教の正義』天覧

「日蓮正宗」という宗名改称が許可になって、清勇居士が『日蓮正宗』という著述を公刊したことは先に述べたが、同書は大正二年にも中弥兵衛の出資によって増補版が再刊され、広く宗内の僧俗に愛読された。余談だが、四十年ほど以前、故山田光太郎（源立寺元総代）が、古びた同書を大事そうにかかえてきて、自分達が若い時分は西宮のほうまで出かけてこれをテキストに講義を受けたことを懐かしそうに語っていたものである。

ところが、この書に、日蓮宗大学の教授藤田恵暁らが書評として、『日宗新報』（日蓮宗の機関誌、大正二年三月二十三日六四八輯）誌上で批判を加えてきた。これを好機として荒木清勇は彼らに論戦を挑み、同誌上（七月十二日七一六輯から）で藤田恵暁と論戦、清

水龍山とも論戦を交え、論述は連載十六回におよんでいる。また、本宗機関誌『白蓮華』にも「清水龍山先生の解答を駁す」と題して三回連載されている。

大正四年十一月、日本中が大正天皇の即位式で慶祝ムードにあふれた。その一方、清勇は宗門伝統の天奏に倣って皇室や為政者を折伏教化すべく、ますます法門の研鑽と著述に没頭していたようである。それは皇太后の御瑞夢の一件以来、寺田屋の縁で政府高官にも面識を得ており、国諫の法門書を奏上する人脈を持っていたことが大きい。

そこで、大正天皇の即位式大典記念として中光達（弥兵衛）の資力をもって『大日本国所立聖教の正義』を発刊するとともに鶴丸紋入り金襴特別装幀の献本を数部作り、天皇・皇后両陛下に伝献し、併せてこれも特製の装幀本を各宮家や各大臣貴顕に献呈した。また並製は施本として広く江湖に頒布している。

この書の概要は巻頭に題字Ⅱ柱師、一期弘法抄Ⅱ布師、題字Ⅱ応師を掲載、巻頭写真として富士天母原・大石寺御宝蔵・戒壇御本尊を奉掲し、本論は二十章にわたって種熟脱の法門や戒壇論、久遠名字の法門を説いて日蓮本仏論を展開したもの。図表を多く用いて理路整然たる法門書となっている。この内容はやがて福重照平の『日蓮本仏論』に引き継がれ発展することになる。

本書が伝献されるについては、中弥兵衛の紀行文が詳しいので次に紹介する。

(要訳) 「献本紀行

中光達

法兄荒木清勇居士の著『大日本國所立聖教の正義』を、予が御大典紀念として発行し、両陛下並に皇太子殿下に伝献方を大阪府知事に出願したところ、ご採納を賜はり、一月廿日迄に赤坂離宮へ差出すべしとの指令により、一月十六日、清勇居士と夜行列車に同乗して上京した。

あくる十七日好天に恵まれ、午後零時十分東京駅に着す。直ちに仕度を調べて離宮に出頭する。途中、まづ二重橋の畔にて皇居を拝す。ついで離宮に参入して献本を終へ、御受書を拝受せり。

それより乃木將軍の御墓に詣で、寒風の中に声を限りに読経唱題回向して、將軍夫妻並に両令息の冥福を祈る。清勇居士は將軍と旧知なる同郷人のこととて、かつて將軍の在世に両令息の墓に詣でて「ふし拝む御墓しるしは低くけれど誉れは高しおととひの君」と詠し、將軍に呈したるに、將軍ほほえみて受納し給いしに、今や將軍も又歌の中の人となれりとして、眼に涙さへ浮べて物語られたり。(これより將軍の旧邸を見学Ⅱ省略) ここを辞し去りて日応上人猊下を我善坊なる潜龍閣に訪ずれる。猊下は階下に出迎え給いたるは誠に恐入り奉る。延べて坐を賜はるや、

「今回の献本はあたかも国諫状を捧げたるに等しく、しかも蓮興両尊已來歴代の上人が

大日本國所立

皇成のふし

日本皇太子大宮頭日柱顯

苦心焦慮の事業を完行したるものなり」と、過当の御賞詞を被るのみならず、めでたく献本済みたるを祝すとて、丁寧な饗応を賜わり、兩人覚えず盃を重ね、夜に入りて拝辞す。(中略)

十八日も快晴。午前十時より予定のごとく各宮殿下に献本せんとて、すでに大阪府知事のご好意をもって各宮家事務官宛に添書を賜わっており、これと献本とを携へ自動車を走らせた。清勇居士と同乗して、先づ道順なるによりて、

第一に麴町区富士見町の山階宮殿下の御邸に拝趨し、順次番町の久邇宮、四谷区仲町の賀陽宮御邸、赤坂区青山七丁目の梨本宮、麻布区市兵衛町の東久邇宮、芝区参田台町の華頂宮、高輪の北白川宮、朝香宮、虎の門前の東伏見宮、麴町区紀尾井町の伏見宮、最後に永田町の閑院宮各殿下の御邸に参候して献本す。

各宮家には、畏くも応接所に招ぜられ、銘茶並に御紋章付の美事なる菓子を賜わり、意外の幸栄に浴した。これ偏えに大法の御利益なりと自動車の中にて感泣したり。(以下略)

その後、この天覽献本は大いに本宗の存在を宣伝することに寄与したとして、翌大正五

年一月には大石日応師から清勇に賞与本尊が授与されている。その脇書には、

「為大法興隆弘通大現当二世、大正乙卯冬、為大典紀念 著聖教之正義 令解宗門之深奥 天下耳目 不加之 得達 天覽。弘法豈過之哉、其勲功可謂偉大 仍賞与之者也

全国総講頭荒木清勇」(蓮華寺蔵)

と認められている。

すなわち応師はこの著作と天覧を「宗門の深奥を令解し、」と激賞し、「天覧に達するを得る、弘法豈之に過ぎん哉、その勲功偉大といいつべし」と手放して称えている。もって清勇の功の大なることを知るのである。

＊田辺善知の日蓮正宗批判演説会

寒気の厳しい大正六年一月二十一日、五反田駅近くの大崎館で「日蓮聖人教義講習会」と銘打った講演会が開かれた。この講演会は、日蓮宗大学(後の立正大学)の学生らが主になって開催されたもの。宗名改称以来、講演会や施本など布教に力を入れていた日蓮大聖会(正宗)に対し、大正五年十一月、日蓮宗の學生が応師対田辺善知の公開討論を申し入れたが、条件が調わず、それぞれが独自に演説会を開催し批判しあっていた。この時も「講師田辺善知」演題「高等批判日蓮正宗教義一班」と題して案内状が諸方に配られている。

講師の田辺善知は、顕本法華宗から転じて日蓮宗に入り、この頃日蓮宗大学を代表する宗学者として大学の講師を務めていた人物である。また田辺善知は明治三十四年の富士派対顕本法華宗の法論の当事者でもある。この法論は、顕本法華宗側を代表して本多日生・田辺善知が、また富士派からは阿部慈照(後の正師)、大石日応の二人が出て、一宗を賭して開かれたもの。が、本多(顕本側)・阿部(富士側)が登壇して演説した段階で場内騒然となり、官憲から解散を命じられて尻切れトンボに終わっている。その後、再開の交渉もあったが、互いにかげひきがあつて実現せず、双方ともに「我れ勝てり」と一方的に宣伝して終わっている。いま双方の記録を参照してみると、互いの主張を言い放しにただで、教義の内容を比較・論争するにはいたっていないから、勝ち負けが云云できるようなものではない。けれども宗派意識というものは、すべてを自分に都合良く宣伝するのが常のようである。

十六年前の宗論が中止となり登壇せずにおわった田辺善知は、今度は満を持して講演会に臨んだようである。この講演会は一月二十一日と二月十一日・二十一日の三回に分けて演説された。その一回目は「宗祖本仏論」、二回目は「正宗所立の文底秘沈論」三回目は「戒壇論」としてそれぞれ約二時間半にわたった。内容は、本果主義や経巻相承・理壇主義からの批判であつた。会場を埋めた聴衆も大半は日蓮宗大学の学生で、在京の寺院住職

や大学職員が一部まじる程度であった。講演内容も扇動的、揶揄的なものであったらしい。日蓮正宗側からは阿部良玄・田辺喜一らも参加しているが、質問は受け付けられず、一方的な批判に終始している。

この講演会は大坂の荒木清勇にも案内がきていたが、所用のため、ようやく上京できたのは二月十二日だった。さっそく荒木清勇は蓮華寺講中でこの頃東京に居を構えていた田辺喜一(弁護士)らの法友に頼んで筆記録を手に入れ、翌々十四日日蓮宗大学に直接田辺善知を訪ね、さらに翌十五日には池上の日蓮宗宗務院を訪れ、田辺善知・加藤友三郎(講習会幹事)らと面談、筆記録の内容確認と講演原稿の閲覧などを求めたりしている。

日蓮正宗側でもすぐさま二月二十四日に大崎のクラブで、大聖会主催の定例演説会を開催、田辺喜一・後藤亮之助・応師・有元広賀らが登壇して田辺善知に対する反論を行ったが、約七、八十人の大学生がヤジを飛ばし、騒然としたものとなった。

そうこうしているうち、二月二十五日、「高等批判日蓮正宗教義一班」も第三回の講演日をおかえ、上京した荒木清勇は、阿部良玄とともに参加して田辺善知の批判演説を克明に筆記している。

その後、すぐさま行動を起こした清勇は、一人で奔走して同じ会場の大崎館をかり、「日蓮宗大学講師田辺善知先生反駁演説会」と題して諸方に案内し、日蓮宗を代表する学者の教